異常透明

三ケ月ほど前、大ヤケドをしたコンスタンチン君が海上保安庁の航空機でサハリン（樺太）から直行便で札幌へ運ばれてきた。連日のニュース報道でそれまで遠い国だったサハリンが一挙に身近なものとなった。事実近いのである。日本の北端、宗谷岬から海峡をへだててサハリンの南端までおよそ五十キロ、天気のよい日は望遠鏡で白い建物が見えるほどの近さなのである。

気象の用語では水平方向にどこまで見えるかを水平視程または単に視程という言葉を使っている。雨で空気中の汚れが落され風で吹き払らわれると空気が澄んで、稀に五十キロを超えて遠くまで見えることがある。昔は「天気透明」や「異常透明」というロマンの響きをもった言葉を使っていたが、現在では異常視程とよんでいる。

さらに遠くまで見えるのが日本列島の最南端の沖縄県与那国島からの台湾山脈の遠望である。島から台湾の山々が見えると東京（静岡）の距離ほどの百五十キロ以上の視程となる。島の西海岸の丘から黒潮の海越しに見えるのが年にして僅か十日ほどで、とくに夕日の沈み際には茜色の水平線に台湾の山並みを見ることがあれば幸運の一語に尽きる。

世界を見渡せば、対馬から朝鮮半島の南端の釜山までがおよそ七十キロ、英仏の国境のドーバー海峡が四十キロほどでジブラルタル海峡にいたっては僅か十数キロでアフリカとヨーロッパをわけている。国境をはさむと遠く感じるが意外に近く、いずれも異常透明の時には見える範囲なのである。

先日、コースチャ君が病癒えてサハリンに帰ったが札幌から仙台、新潟で乗換え、ハバロフスクへ飛び故郷に戻ったが、往きの直行便にくらべて五倍ほどの距離となってしまった。天気には国境がなく異常透明で見えるほど近い距離も国境の線越しでははるか遠くなってしまうのである。

村松　照男）